

書を抱えてフィールドに出よう!



ありがとうもごめんなさいもいらない 森の民と暮らして人類学者が考えたこと

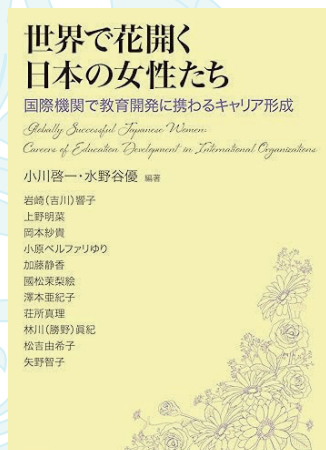
著 者：奥野 克巳
出版社：新潮社 2023年 4月発行

ない者に与えてナンボ。そこに「あたりまえ」とか「おたがいさま」なんて思想はなく、そんな耳障りのいい言葉はむしろ陳腐に感じられます。高度経済成長期に杓子定規的教育を受けた私にとって、反省もない感謝もないプナンの生活や社会構造は、頭では理解できても、現地では感覚や感情が追いつかないと思います。

本書を読むと私の頭の中でリフレインした歌があります。♪なんにもないなんにもないまったくなんにもない。うまれたうまれたなにがうまれた…。「はじめ人間ギャートルズ」のエンディングテーマ「やつらの足音のバラード」です。

私にとって本書で特に印象的なのは「文庫版あとがき」です。コロナの世界的流行が落ち着いた後にプナンを再訪した際のエピソードが綴られています。2022年の狩猟社会（Society1.0）にはwifiとスマホが普及（Society4.0）していました。筆者は、それでも変わらないプナンの「内面」に言及しますが、私は現代版「やつら」の足音を感じてしまいます。ギャートルズの「やつら」はニンゲンを指していましたが、今回は便利さや効率性ばかりを目指す、近代化や物質主義という逃れられない「やつら」の足音を。（紹介者：小笠原理恵）

「森の民」とは、インドネシアのボルネオ島で狩猟採集中心の生活を営むプナンの人びとのことです。本書には、2006年から10年間プナンと生活を共にした筆者（人類学者）の考えが綴られています。筆者が描くプナンの放屁や性欲（恋愛?）、アホ犬などの日常は、マンガのようにオモシロイ。持つ者は持た



世界で花開く日本の女性たち 国際機関で教育開発に携わるキャリア形成

著 者：小川 啓一・水野谷 優 編著
出版社：東信堂 2024年12月発行

も添えられています。

ページをめくるうちに、彼女たちは一つの決まったルートではなく、さまざまな道を通して教育開発の分野で夢を実現してきたのだということが伝わってきます。文章からは著者らの生き生きとしたエネルギーが垣間見え、読者に力を与えてくれます。

特に印象的だったのは、キャリアの築き方が十人十色であること、そして「国際機関で働くこと」を目的にするのではなく、「どんな課題に貢献したいのか」「どの立場から関わりたいのか」という視点を大切にすべきだと、何人もの登場人物

が繰り返し強調していた点です。

これから世界に飛び出したいと願いながら、まだ具体的なイメージを持てずにいる人、キャリアとプライベートの両立に悩む人にとって、本書は優しく、そして力強く背中を押してくれる本となるでしょう。女性に限らず、すべての読者に勇気を与える一冊だと思います。

さあ、本書を手にとって、彼女たちと人生の冒険に出かけてみませんか。（紹介者：磯邊綾菜）

「世界を舞台に活躍する日本の女性」と聞いて、あなたはどのような姿を思い浮かべるでしょうか。

本書では、ユネスコ、OECD、GPE、世界銀行、ユニセフといった国際機関で働く11人の女性たちが、それぞれのキャリアと家庭にどう向き合い、自らの人生を切り開いてきたのかを語っています。未来を担う若者たちに向けたメッセージ